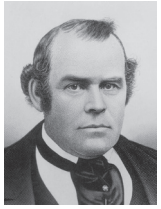
「威厳と風格」

十二使徒定員会のパーリー・P・プラット長老（1807 – 1857 年）は，ミズーリ州リッチモンドで預言者ジョセフ・スミスとともに投獄されていた間に起こった事柄について，次のように述べています。



「いつものとおりうんざりするような晩のこと，わたしたちは真夜中過ぎまで，横になって寝たふりをしていました。看守たちのひわいな冗談や聞くに堪えない汚い言葉，恐ろしい瀆神の言葉，下品な話が何時間も聞こえてきて，耳も心も痛みました。プライス中佐を筆頭に，彼らはファーウェストかいわいにいたときに『モルモン』の中で犯した行い……を数え上げていました。さらに，既婚女性や娘や独身女性に暴行し，男性や女性，子供の脳を撃ち抜いたり殴り割ったりしたと自慢しました。

わたしは聞いているうちに，強い不快感と，憤りと，嫌悪感を覚えました。怒りが込み上げてきて，立ち上がって看守どもを叱責せずにはいられなくなりました。……〔しかし〕わたしはジョセフにも，他のだれにも，何も言いませんでした。……突然，ジョセフが立ち上がり，雷鳴のように，あるいはほえたけるライオンのように，覚えているかぎり次のように言いました。

『黙れ。地獄の底からはい出て来た悪魔め。イエス・キリストの御名によっておまえたちを叱責し，口をつぐむように命じる。もう一刻たりともそのような言葉を聞いてはいられない。そのような話をやめよ。さもなければおまえたちかわたしのどちらかが，今すぐ死ぬことになるぞ。』

ジョセフは話すのをやめました。恐ろしいほどの威厳をもって，背筋を伸ばして立っていました。鎖につながれ，武器も持たず，静かに，落ち着いて，天使のように堂々と，おじけづいた看守たちを見据えていました。看守たちは武器を下ろしたり，地面に落としたりしながら，ひざを震わせ，隅で縮こまり，ジョセフの足もとにかがんで赦しを請う者もいました。そして見張りを交代するまでおとなしくしていました。……

……わたしはもろもろの王国の命運を決定するために集まった王，王宮の部屋，王座，王冠，皇帝を想像しようと努めました。しかしこの小さなミズーリ州の村の牢獄で，真夜中に鎖につながれて立っている人ほど威厳と風格を持った人を，わたしはこれまで一度も見たことはありませんでした。」（*Autobiography of Parley P. Pratt*, ed. Parley P. Pratt Jr. [1938], 210–11; spelling standardized）

- この話から，ジョセフ・スミスについてどのようなことを学べますか。